ルンペルシュチルツヒエン

グリム兄弟
楠山正雄訳

むかし、あるところに、こなやがありました。水車小屋でこなをひくのを商売にして、まずしくくらしてはいましたが、ひとり、きれいなむすめをもっていました。

ところで、ひょんなことから、このこなやが、王さまとむかいあって、お話することになりました。そこで、すこしばかり、ていさいをつくろうため、粉屋はこんなことをいいました。

「わたくしに、むすめがひとりございますが、わらをつむいで、金にいたします。」

王さまは、こなやの話を聞いて、

「ほほう、それはめずらしいげいとうだね。ほんとうに話のとおり、おまえのむすめに、そんなきようなことができるなら、さぞおもしろいことであろう。では、あした、さっそく城へつれてくるがいい。ひとつ、わたしがためしてみてやろう。」と、いいました。

　さて、むすめが、いやおうなし、王さまのところへつれてこられると、王さまは、むすめをさっそく、わらのいっぱいつんであるおへやにいれました。そうして、糸車とまきわくをわたして、こういいました。

「さあ、すぐと、しごとにかかるがよい。今夜からあしたの朝はやくまでかかって、このわらが金につむげ

なければ、そちのいのちはないものとおもうがよいぞ。」

こういいのこして、王さまは、じぶんでへやの戸に、じょうをかってしまいました。むすめは、ひとりぼっち、あとにのこりました。

さて、むすめは、ぽつねんとそこにすわったきり、いったいどうしたらいいのか、とほうにくれていました。わらを金につむぐなんて、そんなこと、まるでわかりようはありません。だんだん、心配になってきて、とうとう、たまらなくなると、むすめはわっと泣きだしました。

するうち、ふと、戸があきました。ひとり、豆つぶのように小さな男がはいってきて、こういいました。

「こんばんは、こなやのおじょっちゃん、なんでそんなにかなしそうに泣きなさるえ。」

「まあ、あたし、わらを金につむがなければならないのだけれど、どうしてするものだかわからないの。」と、むすめはいいました。

すると、こびとがいいました。

「わたしが、かわりに、それをつむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「この首かざりをね。」と、むすめはいいました。

こびとは、首かざりをもらうと、糸車の前にすわりました。ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、まきわくは、金の糸でいっぱいになりました。それから、こびとは、また二ばんめのまきわくをかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、三どめで、またふたつめのわくが、いっぱいになりました。こうやって、あとから、あとからとやっていくうち、朝になりました。もうそれまでに、のこらずまきわくは、いっぱい金の糸になっていました。

　お日さまがのぼると、もうさっそく、王さまはやってきて、へやじゅうきらきら光っている金をみて、びっ

くりしました。すると、よけい、いくらでももっと金がほしくなりました。

王さまは、また、こなやのむすめをもうひとつの、やはりわらのいっぱいつんである、しかもずっと大きなおへやへ、つれていかせました。

そうして、こんどもまた、いのちが惜しかったら、ひと晩でこれを金の糸につむげと、いいつけました。

むすめは、どうしていいかわからないので、泣いていますと、こんどもやはり戸があいて、そこにこびとが姿をあらわしました。そうして、

「わらを金につむいだら、なにをわたしにほうびにく

れるえ。」と、いいました。
「わたしの指にはめているゆびわ。」と、むすめはいいました。
こびとは、ゆびわをもらうと、また糸車をぶるるん、ぶるるん、まわしはじめました。そうして、朝までに、のこらずのわらを、きらきら光る金の糸にしあげました。
王さまは、うずたかい金の山をみて、にこにこしながら、でも、まだまだそれだけではまんぞくできなくなりました。それで、またまた、わらのいっぱいつんである、もっと大きいへやへ、こなやのむすめをつれ

ていかせました。そうして、
「さあ、今晩のうちに、これをしあげてしまうのだよ。そのかわり、しゅびよくそれをしとげれば、わたしの妃にしてあげる。」と、いいました。
「よし、それがこなやのむすめふぜいであるにしても、それこそ世界じゅうさがしたって、こんな金持の妻はないからな。」と、王さまは考えていました。
さて、むすめがひとり、ぽつねんとしていますと、れいのこびとは、三どめにまたやってきて、こういいました。
「さあ、こんどもわらを金につむいであげたら、なに

をほうびにくれるえ。」

「あたし、もう、なんにもあげるものがないわ。」と、むすめはこたえました。

「じゃあ、こういうことにしよう。王さまのお妃におまえがなって、いちばんはじめにうまれたこどもを、わたくし［＃「わたくし」は底本では「わたしく」］にくれると約束（やくそく）おし。」

（どうなるものか、さきのことなぞわかるものではないわ。）と、こなやのむすめは考えていました。

それに、なにしろせっぱつまったなかで、なにをほかにどうしようくふうもありません。それで、むすめ

は、こびとののぞむままの約束をしてしまいました。そうして、こびとは、三どめにまた、わらを金につむいでくれました。さて、そのあくる朝、王さまはやってきてみて、なにもかも、ちゅうもんしたとおりにいっているのがわかりました。そこで王さまは、むすめとご婚礼（こんれい）の式をあげて、こなやのきれいなむすめは、王さまのお妃になりました。

一年たって、お妃は、うつくしいこどもを生みました。そうして、もうこびとのことなんか、考えてもいませんでした。すると、そこへひょっこり、こびとがへやの中にあらわれて、

「さあ、約束のものをもらいにきたよ。」と、いいました。

お妃はぎくりとしました。こどもをつれて行くことをかんにんしてくれるなら、そのかわりに、この国じゅうのこらずのたからをあげるから、といってたのみました。でも、こびとは、

「いんにゃ、生きているもののほうが、世界じゅうのたからのこらずもらうより、ましじゃよ。」と、いいました。

こういわれて、お妃は、おろん、おろん、泣きだしました。しくん、しくん、しゃくりあげました。それ

で、こびとも、さすがにきのどくになりました。

「じゃあ、三日のあいだ待ってあげる。」と、こびとはいいました。「それまでに、もし、わたしの名前をなんというか、それがわかったら、こどもはおまえにかえしてあげる。」

そこで、お妃は、ひと晩じゅう考えて、どうかして、じぶんの聞いて知っているだけの名前のこらずのなかから、あれかこれか、考えつこうとしました。それから、べつにつかいの者をだして、国じゅうあるかせて、いったい、この世の中に、どのくらい、どういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわず、のばせるだ

け足をのばして、たずねさせました。

そのあくる日、こびとはやってきました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツェルだの、でまかせな名前からいいはじめて、およそ知っているだけの名前を、かたはしからいってみました。でも、どの名前も、どの名前も、いわれるたんびに、

「そんな名じゃないぞ。」と、こびとは首をふりました。

二日めに、お妃は、つかいのものに、こんどはきんじょを、それからそれとあるかせて、いったい世間では、どんな名前をつけているものか聞かせました。そうして、こびとがまたくると、なるたけ聞きなれない、

なるたけへんてこな名前ばかりよっていいました。
「たぶん、リッペンビーストっていうのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シュニールバインかな。」
でも、こびとはあいかわらず、
「そんな名じゃないぞ。」と、いっていいました。
さて、三日めになったとき、つかいのものはかえってきて、こういう話をしました。
「これといって、新しい名前はいっこうにたずねあたりませんでしたが、ある高い山の下で、そこの森を出はずれたところを、わたくしはとおりました。ちょう

どそこで、きつねとうさぎが、さようなら、おやすみなさい、をいっておりました。そのとき、わたくしはふと、そのへんに一けん、小家（こいえ）をみつけました。その家の前に、たき火がしてありまして、火のまわりに、それはいかにもとぼけた、おかしなかっこうのこびとが、しかも一本足で、ぴょんぴょこ、ぴょんぴょこ、とびながら、はねまわっておりました。そうして、いうことに、

　きょうはパンやき、あしたは酒つくり、
　一夜あければ妃のこどもだ。
　はれやれ、めでたい、たれにもわからぬ、

おらの名前は、
ルンペルシュチルツヒェン。

と、こうもうしておりました。」

つかいの者の話のなかから、こびとの名前を聞きだしたとき、お妃はまあ、どんなによろこんだでしょう。みなさん、さっしてみてください。さて、そういうそばから、もうそこへ、れいのこびとはあらわれました。

そうして、「さあ、お妃さん、どうだね、わたしの名前はわかったかい。」と、いいました。

お妃はわざとまず、

「クンツかな。」

「ちがうわい。」

「では、ハインツね。」

「ちがうわい。」

「じゃあ、たぶん、おまえの名前は、ルンペルシュチルツヒェン。」

「悪魔(あくま)が話したんだ、悪魔が話したんだ。」と、こびとはさけびました。そうして、腹だちまぎれに、右足で、したか大地をけりつけると、からだごとうずまるくらい深い穴(あな)があきました。それから、いかりたけって、両手に左足をひっぱるひょうしに、じぶんでじぶんのからだを、まっぷたつにひきさいてしまいました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店
１９４９（昭和24）年２月20日初版発行
１９４９（昭和24）年12月30日４版発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
入力：大久保ゆう
校正：浅原庸子
２００４年６月16日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。